平成7年(1995年)3月1日 第4号

Société Franco-Japonaise d'Orthopédie 日仏整形外科学会

INFOS

日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

会長 七川歓次
Président : K. SHICHIKAWA
副会長 菅野卓郎
Vice-Président : T. SUGANO
副会長 小野村敏信
Vice-Président : T. ONOMURA
書記長
Secrétaire général :
小林 晶
A. KOBAYASHI
書記・会計
Secrétaire et Trésorier :
瀬本喜啓
Y. SEMOTO
大橋弘嗣
H. OHASHI
事務局：
〒569 大阪府高槻市大学町2－7
大阪医科大学整形外科学教室内
Tel. (0726)83-1221 代表
(内)2364
Fax.(0726)82-8003
Bureau :
Osaka medical college
Dep. of Orthopedic Surgery
Takatsuki, OSAKA 569 Japan

会長挨拶

第3回日仏整形外科合同会議(AFJO)に出席して

七川 歓次

第3回AFJOは昨年11月7日に、パリーでのSOFCOT(フランス整形外科・災害外科学会)の前日パレ・デ・コングレで開催されたが、その規模といい、熱気といい、第1回の時とくらべ格段のちがいが感じられた。

今回は日本からの参加者が90名近く、発表演題数も制限した上で26題に及び、数の上からも見ちがえるようであったが、何よりも主催者側の企画と心のこもった歓迎がこの学会を極めて印象深いものにしてくれたようである。

学会の前日の午後には、参加者の多くが宿泊しているホテル・メリディアン(エトワル)で、IMPACT社の人工関節に関する討論会が前会長のピコー先生の司会で開かれた。これは自由参加の会であったが、面白く、大いに啓発された。ALPINA膝人工関節の紹介の後、THR重度失敗例における大腿骨側の再手術に、transfemoral approachとstemの遠位側仮止めを用いたピコー先生の手術手技と成績を見せられ、その創意工夫に圧倒された。

この日の夜、BATEAU－MOUCHE(セーヌ川観光船)に全員が招待され、セーヌ川沿いの夜景のなかで、ディナーと葡萄酒とともに大いにパリーの雰囲気を味わせてもらった。それに私の予期に反して大勢のフランス整形外科医達が参加し、クルピエ会長が歓迎の辞を述べるなど、随分と気を使ってくれていたようである。

学会は朝早くから聴衆の溢れる中で始まった。ピコー先生と小野村教授の開会の挨拶の後、これまでと同様、日本人の口演一つ一つにフランスの著名な整形外科医のmoderatorがコメントを行い、ついで討論に移る形式がとられた。問題の核心を掴み、基礎的なことも臨床の問題として捉え、興味を唆えるように努めるmoderatorのやり方に感心させられた。ただ前回とちがって、同時通訳が日仏間で行われた。英語でやりとりしているとどちらの国の人にもわかりにくいことになるのではないかという配慮からだそうであるが、そうなると通訳の力量が問われることになるだろう。また優秀なcommentatorにふさわしい内容の仕事がのぞましいし、うまく通訳されて演者の考えがよく伝達されねばならない。小野村教授のsevere spondylolisthesisに対するposterior one-stage operationは感銘深く聞かれていたようであった。

口演のプログラムの終了後閉会のセレモニーがあった。AFJOの書記長として、コレール教授に続いて小林 晶先生の挨拶があり、AFJOの歴史と今後の発展について述べられた。新しく会長を引き継いだクルピエ教授の後で私も挨拶したが、この中で、日本の医師はこれまで学びとることばかりに専念してきたが、これからは独創性のある仕事によって世界に貢献しなければならず、そのために少しでも本会が役立ててほしいこと、さらに日仏整形外科医の間での共同研究を進めてはどうか、たとえば膝関節症や股関節症の成因と治療に関する調査研究などはどうかと提案して閉会の辞とした。その後思いがけずピコー先生がクルピエ会長と私にAFJO会長のメダルをもってたたれ、首にかけらけたのにはびっくりすると同時に、細心な心遣いに感じ入るばかりであった。

この日の晩餐会がHotel Concorde Lafayetteであり、これにも全員が招待された。この会でコシャン病院のリウマチ学のルヌー教授夫妻に会ってびっくりした。この人は私のパリー留学中の同輩で、日仏医学会のフランスの会長であるだけに日本語が堪能であり、日本語で手紙が書ける数少ない、しかも私にとって身近なフランスの医者である。この晩餐会には久し振りにポステル夫妻とも同席して、私にとっては殊に心なごむ会であった。

会の終わりに菅野副会長が謝辞を述べられた。立派なフランス語で、意を盡して余りあるように思えた。そしてピコー先生のこれまでのAFJO会長としての功績を讃え、日仏整形外科学会（SOFJO）として名誉会員に推挙したい意向を伝え、大きな拍手に包まれた。答礼に立ったピコー先生の目がうるんで、声がつまっているように思えた。日本の会員の支援と協力に感謝し、瀬本書記とジラン夫人に満腔の謝意を表し、殊に瀬本医師の献身なしでは本会を運営できなかったであろうと述べられた。国際学会で、このように心の交流が浮き彫りになるのは珍しいことに思えた。これは日仏整形外科学会が花開き始めたことも伝える象徴的なことではないかと思った。

この日の役員会で、次回のAFJOは2年後に東京で、日本整形外科学会に接して開催されることがきまった。したがって今から時間的な余裕が少なく、急がれるので、次回AFJOを成功させるため、会員の皆様方の倍旧のご援助とご鞭撻とをお願いしたい。

第3回日仏整形外科合同会議（AFJO）パリにて開催

日仏整形外科学会
副会長　菅野　卓郎

1994年11月7日パリにおいて第3回日仏整形外科合同会議 3e Réunion de l' Association France-Japon d' Orthopédie（AFJO）が開催された。この会は日本の日仏整形外科学会Société Franco-Japonaise d' Orthopédie（SOFJO）とフランス側の日仏整形外科学会の合同学会で、その第1回は1990年11月パリにおいて、ついで第2回が1992年10月京都で行われ、今回が第3回を迎えたわけである。すなわち2年ごとに日仏交互の国で主催することになっている。第1回と同じようにフランス整形外科学会（SOFCOT）開催日11月8～11日の前日に行われた。そして会場もSOFCOT会場と同じPalais des Congrèsの中の一会場が当てられた。この会はSOFCOTが全面的に後援し、SOFCOT会員は全員出席の資格がありフランス側の登録はすべて同学会が行っている。

今回日本からは日仏整形外科学会会員56名とその家族を含めて85名が参加し、フランス側からはおおよそ150名が出席しての活気ある会になった。

学会前日の11月6日午後からは数名のフランス整形外科医と日本側有志との間でフランスの人工関節についてのミーティングが行われた。それにはInstitut Callotグループ開発の人工膝関節と本会会長のC. Picault教授の人工股関節について講演があった。日本ではどちらかというと馴染みの薄いフランスの人工関節を是非この機会にみてほしいという意向であったようである。これは終始Picault先生ご自身が熱心に司会された。Picault先生のFemoral prosthesisはとくに再術例に大腿骨を縦に開いて再置換するというユニークなものであった。

同夜は歓迎パーティとして日本人全員セーヌ川の「バトー・ムーシュ」に乗船し、両岸の夜景を眺めながらの楽しい夕食会の招待を受けた。

さて11月7日の学会は朝8時半、まずフランス側Picault会長ならびに日本側 小野村副会長の挨拶ではじまった。ただちに最初のセッション小児整形外科7題、ついで膝関節の外科3題、股関節の外科6題、午後からは上肢の外科5題、その他5題が発表された。それぞれのセッションにフランス人と日本人の司会者がつき、前回同様各発表ごとにその部門でのフランスの第一人者がコメントをするというようにプログラムが組まれフランス側の熱の入れ方が伺えた。うしろに全演題の日本語訳と演者、フランス側指定発言者および司会者を記載しておく。今回はフランス側のはからいで日・仏語の同時通訳がなされた。専門が多方面のため通訳者にとってはかなり難しい面もあったようであるが、ともかく自国語で話せるという気楽さがあり討論も活発で、言葉の問題で行き詰まって先に進まないというようなことがなかったのはよかったと思う。前述のように今回は今までにも増して多数が参加し、日仏両国整形外科医200名が一同に会する機会がもてたことはまことに素晴らしく嬉しい限りであった。

演題発表は滞りなく午後5時すぎに終了し、日本側より七川会長、小林書記長の挨拶があった。それはこの第3回合同会議をこのように立派に準備し開催していただいたことに対するお礼と、また両国整形外科の交流がこれまで立派に実現できるようになったことは素晴らしく、フランス側のご尽力に感謝するとともに今後益々会の発展することを祈るという趣旨のものであった。

つづいてフランス側事務局よりKholer先生が両国合同役員会での決定事項の説明があった。すなわちAFJO発足以来長年にわたって会を育てて下さったPicault先

生が今学会を最後にフランス側会長を退かれ、新会長にパリ大学のCourpied先生が就任されること、さらに日本にも留学し手の外科専攻のリヨン大学のChassard先生が事務局を担当すること、次回の第4回AFJOは1996年東京において開催すること、また日仏同時通訳のほかに英語による討論もとり入れること、日仏青年整形外科医師交換留学生は今まで通りそれぞれ2名づつの派遣を継続すること、などが報告された。学会修了後全出席者が会場ロビーでのカクテルパーティに参加し6時すぎ盛会裡に閉会した。

同夜8時よりConcorde Lafayetteホテルにおけるディナーパーティに家族を含む日本人全員が招待された。各テーブルに日本人とフランス人が入り交じって和気藹々のうちに素晴らしい正式フランス料理をいただいた。終わりにPicault先生がフランス側会長を辞任するに当たって、今まで会長を助けていただいた両国会員のすべてに感謝の意を表し、会の発展を祈る旨を挨拶があった。日本側から菅野がこの学会の開催ならびに歓迎のパーティ、さらに当日の晩餐会などフランス側の厚いもてなしに対する謝辞を述べ、Picault先生を日本側の日仏整形外科学会（SOFJO）の名誉会員に決定した旨を発表した。

最後になったが第1回以来会の準備から開催そのもの、フランス側と日本側の間に立って終始献身的なお世話をいただき、かつ通訳の労をもとっていただいたGirin-Komori夫人には心から感謝致したい。

今回の第3回AFJOは第1回、第2回と回を重ねるごとに益々参加者も増え、充実してきたことを痛感し喜んでいる。出席した日本側会員一同、彼等フランス人がこれほどまで日本の整形外科に関心を寄せていることに驚いたと同時に、日本人に対して大変な好意をもっていることを肌に感じて帰って来られたことと思う。

第4回AFJOは前述のごとく1996年東京において開催されることになっているが、日仏整形外科の交流がさらに大きく一歩前進できるような会を実現したいと考えている。会員の方々の絶大なご支援を心からお願い申し上げる次第である。

クルピエ副会長と菅野副会長

開会式風景
左からジラン夫人、小野村副会長、
ピコー会長、コレール書記長

第3回AFJOの開会式の挨拶

日本側

日仏整形外科学会
副会長　小野村　敏信

皆さんおはようございます。

この前京都でお会いし、お別れしてから早くも2年たちました。今日またここで皆様にお会いできますことは、われわれ日本の日仏整形外科学会員にとって大きな喜びであります。

過去2回の学会において我々はお互いの経験を発表することを通じて、それぞれの整形外科学に大きな進歩を加えることが出来たと思っています。またそれにも増して、日本とフランスの整形外科医の友好を深めることができましたことは大きな喜びであります。またこの会合と同時にスタートした日仏整形外科医の交換研修制度も着々とその成果をあげています。このようにこの会が順調に発展を続けてくることが出来ましたのはPicault先生をはじめフランス整形外科学会の皆様ならびに事務局をお手伝いしていただいたいるGirin夫人のご理解とご努力によるものであり、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回の会合には約90名が日本からやって参りました。私たちの整形外科を知っていただくと同時に、皆様と意見の交換ができますことを楽しみにしております。本日が実りの多いものであることを願って簡単ですがご挨拶といたします。

有り難うございました。

フランス側

ＡＦＪＯ
会長　C. PICAULT

今回の第３回AFJO会議で、ご挨拶させて戴けます事を、大きな喜びと共に非常に感激しております。

先ず最初に、日本の先生方に敬意を表させて戴きます。特に七川、小野村教授、菅野、小林両先生そして瀬本先生に厚く御礼申し上げます。

又、SOFCOT（フランス整形外科災害外科学会）の正式会議に先立っての一日を学術会議の為に準備下さる等、多大なる御協力を下さった、SOFCOT会長アンリー・ドジュール教授や、第一事務局長ノルダン先生そして第69回SOFCOT学会会長のブルマン先生方に深く御礼申し上げます。又ジラン夫人の御尽力にも、感謝申し上げます。

日仏整形外科日本事務局でお世話下さっている瀬本先生の御協力と活動は素晴らしいものです。疲れを知らない先生、学術面にとどまる事なく、人間関係の交流をスムーズに運んで下さっております。

深い友情の下に発足し、今日迄続いているこの交流、おかげ様で両国の外科医メンバーも年々増えて、その相互発展の効果も上がって来ております。

AFJO（日仏整形外科協議会）の活動は、学術会議と相互の交換留学生制度等幅広いものです。

学術会議は、第１回目が1990年パリで開催され、第２回目が1992年京都で、そして今回、第３回目の会議がパリで開催される次第です。

本会議では日本側から26人の整形外科医の演題発表が行われ、コメントと討論はフランス側外科医の先生方によって進められます。

又、当会議に参加協力して下さいました、GEOP（フランス小児整形外科学会）会長でいらっしゃるスランジュ（R. Seringe）教授の御出席を戴けまして光栄に存じております。

AFJOの活動は、学会プラス交換留学生研修を行っております。この活動が続けられるのも、ひとえにSOFCOTの占める役割がおおきい事、そして受け入れ先の整形外科の先生方の御協力が鍵となっております。残念乍らフランスに於ける青年交換外科医の先生方の受け入れ体制に大きな困難が伴っているのが現状です。フランスの青年外科医の方々が日本で受けられた印象を全てここでお伝えするのは難しいのですが、少なくともフランスに留学された日本の先生方には、フランスとフランス人に対する良い印象、思い出を持って帰国して頂きたいと願っております。

AFJOフランス事務局側にいくつかの変更がございます。

新しい事務局のメンバー：会長クルピエ（COURPIED）、副会長コーレル（KOHLER）、事務局長シャサール（CHASSARD）、会計コレ（COLLET）、名誉会長のミッシェル教授（Prof. MICHEL）は退会されます。ミッシェル教授は今回御出席出来ないのを、とても残念に思っておられました。

私自身、会長の座を離れる事になりました。この会が発足して以来、力強くて美しい日本を知る機会に恵まれ、又深い友情のきずなを結ぶ事が出来、感激しております。この友情の価値は口では言い表せない大きいものです。

AFJOのダイナミックな活動は、遠く離れ異なった国と人との間で友情の交流を持続確保していく事であります。私の過ごしてきたこの数年間が、この会に頑丈で確かな組織を築いてくれたと言えるでしょう。

新しい事務局は更に活動的に効果を上げていかれると信じております。

最後に御参加の皆様に心からの感謝と、厚い信頼の気持ちをお伝え申します。どうも有り難うございました。

ピコー会長　　瀬本書記

第３回日仏整形外科合同会議に参加して

国立療養所千石荘病院
整形外科　西澤　徹

第３回日仏整形外科合同会議が、11月７日パリで開催され、出席してまいりました。

９月に関西新空港が開港、大阪ーパリ直行便も開通し、おかげで、より快適で思い出深い旅となりました。学生時代に、ド・ゴール空港の芸術的な建築感覚に感激したものですが、どうしてどうして、新空港もそれに負けない斬新さを持っていると思いました。

会議前夜には、今会議の主催者であるPicault教授から、セーヌ川遊覧船バトームッシュでのディナークルーズに招待されました。参加者ほぼ全員の出席でしょうか、

貸し切りの船内は満員でした。船から見たエッフェル塔、アレキサンダーⅢ世橋の美しさは格別でした。

学会はパレ・デ・コングレで開催されました。フランス整形外科学会が毎年行われる国際会議場です。開始時間の8時半には、既に多くの参加者が広い会場の席を埋め、熱気に溢れていました。今回は、発表はすべて日本人で、各々の発表にその分野に造詣の深い仏人が意見を述べ、質問をするという形式がとられました。各口演に会場からも活発な質疑が行われ、時間が足りなくなることもしばしばでした。ただ、おしむらくは、発表と同時通訳の速度がかみあわず空白の時間が生まれることが時折見られたことでした。あらかじめ日仏2ヵ国語での発表原稿が用意されているほうがよかったように感じました。口演は途中だれることなく、盛況のうちに終えられました。

夜にはPicault教授主催の晩餐会が開かれました。総勢200名ほどの出席があったのではと思います。婦人同伴の方も多く、艶やかな和服姿の女性もおられ会は一層華やかなものとなりました。多くの仏人も参加し、より楽しい会食となりました。わがテーブルはリヨンの方達が多かったので日仏グルメ談義に花が咲きました。食事はもとよりワインもおいしく、フォアグラにはソーテルヌまで供されPicault教授の心づかいが伝わってきました。3時間ほどがすぐ過ぎてしまい、2年後の日本での再会を約束し会議は終了したのでした。

翌日私は、昨年までお世話になっていたSedel教授のパリ大学整形外科研究所を訪ねていき、仲間との再会を喜びました。皆相変わらず、和気藹々と熱心に研究に励んでいました。しかしながら、フランスの自由で充実した研究環境も、昨今の経済停滞の影響でしょうか、政府が研究費カットを言い出したそうで、「フランスまでも」と暗澹たる思いになりました。

さて今年のパリの秋は暖かかったらしく、マロニエの葉は残り外套も必要なく散歩が心地よかったのですが、会議の翌日から天気がくずれ、冬へと走り出しました。どんよりと低くたれこめた黒い雲と冷たい雨の毎日となり、パリへ戻ってきたことを実感しました。それでも秋から初冬のパリは私の最も好きな季節なので、雨も気にならず、カルチェラタンやバンセンヌの森の散歩は、パリの日々を思い起こさせ私に活力を与えてくれました。

「人々が人らしく暮らす国フランス。今度戻ってくるのはいつだろう。」そう思いながら機中の人となりました。

第3回AFJOプログラム

発表者の後の（　）はフランス側指定発言者

Ⅰ．小児整形外科（座長　R. Seringe, 小野村敏信）

1．骨肉種におけるオステオカルチン、S100プロテインおよびnuclear antigen：増殖細胞の免疫組織学的分析
　茶野徳宏（J. Dubousset）

2．免疫組織化学的分析によるmalignant fibrous histiocytomaのphénotype
　石沢命仁（G. Bolliri）

3．大腿骨頭辷り症の治療
　志賀俊樹（C. Bonnard）

4．孤立性骨嚢腫に対する経皮的骨穿孔術による治療
　久保山勝朗（P. Touzet）

5．小児大腿骨頚部骨折後の骨頭壊死
　久保俊一（J. M. Clavert）

6．外傷性内反肘による遅発性尺骨神経麻痺
　阿部宗昭（H. Bensahel）

7．小児大腿骨頭壊死に対する観血的整復術を併用したSalter骨切り術
　藤井俊男（J. P. Metaizeau）

Ⅱ．膝の外科（座長　H. Dejour、小林　晶）

8．膝蓋大腿関節OAに対する外科的治療
　上崎典雄（G. Gacon）

9．膝蓋骨反復性脱臼および亜脱臼に対する新しい外科的治療
　越智光夫（M. Mathieu）

10．ACL断裂後のMRIの骨挫傷
　数面義雄（J. Witwoet）

Ⅲ．股関節外科（座長　J. P. Courpied、菅野卓郎）

11．大腿骨頭壊死に対するBateman prosthesisの10年以上のfollow up
　田中千晶（J. C. Cartillier）

12．MRIによる大腿骨頭壊死の分類
　山添勝一（J. H. Aubriot）

13．大腿骨近位骨髄腔のTaper角について
　柳本　繁（M. Meyrueis）

14．変股症に対するCUP形成術の臨床成績
　坂巻豊教（M. Postel）

15．Charnley人工股関節手術の10年以上の成績
　小浦　宏（J. P. Clarac）

16．寛骨臼骨折81例の成績
　藤原正利（D. Poitout）

Ⅳ．上肢の外科（座長　J. J. Comet、七川歓次）

17. 手根管症候群に対する手根横靱帯拡大形成術の経験
　塩田悦仁（F. Lubrana）
18. 尺骨神経麻痺を伴った上腕骨滑車両側性形成不全の１例
　金子和夫（P. Merloz）
19. 血液透析患者における手根管症候群の長期治療成績
　吉田英次（P. Livemaux）
20. 手舟状骨非転位骨折の治療
　楢林葉子（M. Chassard）
21. 慢性関節リウマチに対する京セラⅠ型人工肘関節
　井沢一隆（M. Mansat）

Ⅴ．その他（座長　C. R. Michel、瀬本喜啓）

22. Coral powder移植後の骨変化
　西沢　徹（J. C. Pouliquen）
23. 反復筋肉内注射による三角筋拘縮
　荻原博嗣（Kerboull）
24. 橈骨関節内骨折の治療と評価：舟状骨月状骨角と手関節可動性の関係
　田中晴人（J. Y. Alnot）
25. 重度脊椎辷り症に対する後方手術
　小野村敏信（F. Michel）
26. 慢性関節リウマチにおける頸椎のMRI所見
　桑原　茂（P. Roussouly）

閉会式風景
左からコレール書記長、クルピエ副会長、
七川会長、小林書記長

日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修帰朝報告

【平成５年度】

Lyonでの研修

岡山市立市民病院整形外科
小浦　宏

日仏整形外科学会の交換研修医制度で平成５年９月から３ヵ月間、LyonのPicault先生、Cartillier先生、Caton先生のもとで主に人工股関節の研修をさせていただきました。

Lyonはle Rhône川とla Saône川が合流した所にある古い歴史を持つフランス第２の都市で、日本で言うと京都のような街です。私は街中のPl. des Jacobinsという広場の近くに住んでいましたが、すぐ近くにla Saône川が流れ、川向こうの丘の上にはFourvière寺院が見える美しい所でした。毎日川沿いに朝市が立ち時々買物に出かけましたが、歩くだけでも心が浮き浮きする様な活気のあるものでした。夏に朝市で買った一皿10Fのメロンは非常に美味で、半分に切ってスプーンで食べるなどと言う日本では考えられないような贅沢もできました。

街を歩いて乞食が多いこと、犬の糞がいたる所にあることには驚きました。街角や地下鉄の入口には必ずと言っていいほど飲んだくれのおじさんか、犬を連れた若者か、子供を連れた女性が空缶を前にして座っていました。これはLyonだけではないようで、テレビ番組の特集でやっていましたが（フランス語は解りませんので画面からだけの判断ですが）、ドイツ、フランス、イタリアの大きな都市では同じ様な状況のようです。やはり、世界的に景気がよくないのでしょう。

「Lyonは美食の都とも言われる。」とガイドブックにありましたので、あの有名なPaul Bocuseには行けませんでしたが、ガイドブックに載っている市内のレストランへも行きました。初めは腹が減っていた事もあり調子良く食べていましたが、途中からおなかがふくれ食べる事だけで精一杯になり、料理の味を楽しむことなどできなくなりました。チーズやケーキがでる頃には、残してなるものかと根性だけで食べている状態で、最後のコーヒーを飲み終わったときにはほっとしました。結局、高い金を払って何をしにいったのか良く解りませんでしたが、Quenelles Lyonnaisという魚のすり身だんごは非常に美味しいと思いました（初めの頃に出たせいかも知れませんが）。

Cartillier先生が勤務しておられるClinique Mutualiste E.-AndréとCaton先生の個人病院であるClinique Emilie

de Vialarへはバスで通いました。最初は違う路線のバスに乗ったりして困ったこともありましたが、Lyonの人々の通勤、通学の様子も解り結構楽しいものでした。

それぞれの病院で手術場での研修が主でしたが、外来患者や入院患者もみさせてもらいました。どちらの先生も沢山の症例を持っておられ、親切に各々の症例を説明してくださったのでたいへん勉強になりました。Cartillier先生はCORAILという機種の人工股関節を、Caton先生はChamley型を使用されていました。二人とも多くの症例を経験されているので、手術手技に関しても勉強になりました。また、外反母趾の手術が多いのには驚きました。

Picault先生には研修全体を通してお世話になりました。最初に人工股関節の再置換術が見たいと言っておりましたところ、2回ほど再置換の手術に連れていってもらい、Picault先生が考案されたシステムを横止めする機種の手術を見学することができました。これから日本でも再置換術が増加していくと思われますのが、いかに対処して行くかを考える上でPicault先生が考案された機種は非常に参考になる考え方だと思いました。

3ヵ月と短期間ではありましたが、私にとっては整形外科学上の事だけでなく色々な意味で大変有意義な研修でした。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった会長の七川先生をはじめてする日仏整形外科学会の理事の諸先生方、瀬本先生、そして親身になって世話をしてくださったGirinさんに心から感謝いたします。

【平成6年度】

フランス研修を終えて

むつ総合病院整形外科
西川　真史

1994年9月14日から3ヵ月間、日仏整形外科学会交換研修医としてフランスはリヨンとナンシーの2ヵ所で主に手の外科を中心に研修して来ました。研修施設は学会から斡旋していただいた大学病院です。

初めの2ヵ月間の研修はリヨンのEdouard-Herriot病院です（この病院は各診療科ごとに建物が独立していて団地の様です。すべての建物は地下道で連絡されています)。リヨンでの研修や日常生活については3年前に同じ交換研修医として日本にやって来たMarc Chassard先生がとても親切にめんどうをみてくれたので快適なものでした（彼は大の親日家で、日本ではとても親切なもてなしを受けたとのことです)。

リヨンでの研修は毎朝7時30分の救急部の写真見せか始まります。ここで昨夜の整形外科急患について治療方針が決定されます。

主任教授はProf. Moyonで彼はスポーツ医学と膝の外科が専門でリヨンのプロサッカーチームのチームドクターもしています。冗談が好きで時々引っ掛かってしまいました。彼の下に手の外科専門のProf. Herzbergがいて写真見せのあとは彼の外来や手術を研修させてもらいました。Prof. Herzbergは40代前半の若い教授で手関節と肩関節です。彼の発表している手関節の背側Zアプローチはすばらしい方法でした。外にも様々な試みを行っていてしょっちゅう隣のリヨン大学内のバイオメカニクスや解剖の研究室で実験を行っていました。他にもDr. ChassardやDr. Denjenといった手の外科専門医が毎日のように様々な手術を見せてくれてとても勉強になりました。特にうれしかったのは教授や医師達が日本の手の外科の事や日本人の考えを聞いて何か参考にしようとすることでした。他のスタッフもとても親切で一生懸命英語を話そうとしてくれてフランスのことをたくさん知ることができました。手術室でワインの話題になったとき、手術の間に休憩室に連れて行かれ実際に飲み方を教えてくれたのにはまいりました。

リヨンの街はソーヌ川とローヌ川という大きな二つの川が街を横切り、古い建物がたくさん保存されています。川周辺から西の丘にかけて特に建物が美しく夜は橋と共にライトアップされていて幻想的でした。有名な教会、美術館、博物館、公園など休日ごとに様々な観光をしましたし、Prof. PicaultはHuntingにDr. Chassardはしょっちゅう近郊の観光に誘ってくれました。忘れてはいけないのはリヨンはフランス料理発祥の地だということです。とにかくおいしいです。どの店で何を食べても本当に口に合いました。お陰で私は大のリヨン好きになってしまいました。

リヨンでの研修を終えてパリへ、AFJO（日仏整形外科学会）に参加し、久しぶりに日本人と話ができ、とても楽しく過ごすことができました。里心がついてしまった自分を奮い立たせてパリ東駅からナンシーへ出発。ナンシーはEC本部のあるストラスブルグの手前の地方都市、車窓からの眺めがだんだん閑散として行くのに不安を覚えながら到着。病院名はJeanne d'arc、ナンシーから車で30分の郊外で手の外科と精神科の病院でした。フランスといえばリヨン、パリと大都市のイメージしかなくなっていたためにとうとう最後までナンシーの生活に慣れずもっぱら病院内でばかり生活してしまいました（ここらへんでは英語もほとんど通ぜず、街にでるにはバスを利用しなくてはならず非常に困難が予想されたため出無精になったのもあります)。

主任教授であるProf. Merleは非常に精力的な人で毎日分刻みで仕事をしています。彼は3年前に日本マイク

ロサージャリー学会で来日したことがあり、日本がとても気に入ってるようで特に日本人の仕事に対する哲学が好きだそうです。まわりのスタッフはProf. Merleは日本人のように働くと言っていましたが、フランスのゆったりした生活に慣れた私には彼について行くのが苦痛でした。彼は手の外傷の治療というりっぱな本の著者です。この本はフランス語ですが美しい図がたくさんあり、彼のアイデアがつまっていて思わずうなってしまう名著だと思います。学会発表もたくさんしていて、スタッフはみなとても熱心に研究、勉強していました。

病院は毎朝7時30分のstaff meetingで始まりますここで毎日の手術紹介があります。週一回は症例検討会も合わせて行い、このとき学会予行もしていました。後は患者がいる限り手術、手術です。ナンシーは周辺に工場が多く手の外傷が多い地方だそうで急患も引っ切りなしに運び込まれます。しょっちゅう深夜の臨時手術でした。始めは張り切って見学してましたがあまり毎晩なので自分で調整して見学することにしました。この病院は手の外科のリハビリも充実していて、ちょうどOTを対象とした研修会を開催していたので勉強させてもらいました。スタッフの方々はみなとてもいい人でしたがあまりに忙しいため、あまり日本人はかまってもらえずもう少し私の身分を理解してくれたら色々とdiscussionできたのに残念でした。

フランスでの3ヵ月は私にとってとても貴重な経験でした。多くのことを学び、たくさんの友人ができ、世界観や人生観も変わりました。これからはこの経験を生かしてさらに学会の皆様のお役に立ちたいと思います。

このようなすばらしい経験の機会を与えてくださった七川会長、小野村先生、そして日仏整形外科学会員の皆様に深く感謝致します。

Prof. MERLEと

Prof. HERZBERG（左から2人目）と著者（左1人目）

第6回日仏整形外科学会 日時および場所の変更について

阪神大震災の為、第6回日仏整形外科学会の予定会場であった神戸国際会議場が使用不可能となりましたので、日時および場所を下記のとおり変更いたします。他の雑誌や広報とは異なりますのでご注意ください。

日　　時　平成7年5月10日（水）
（午後6時15分から）
（第39回日本リウマチ学会第1日目終了後）

場　　所　大阪国際交流センター
〒543 大阪市天王寺区上本町8丁目2番6号
電話　06-772-5931

特別講演　「小児悪性腫瘍における切断と患肢温存手術」
Prof. Rémi KOHLER
Lyon大学教授
（日整会教育研修講演1単位）

日仏整形外科学会
会長　　七川　歓次

事務局
大阪医科大学整形外科学教室内
〒569 大阪府高槻市大学町2-7
TEL 0726-83-1221
FAX 0726-82-8003
（お問い合わせは瀬本まで）

日仏整形外科学会

平成五年度会計報告

歳入の部　　単位：円

＊一般会員年会費		243,000
＊賛助会員	医療関連企業	1,100,000
	一般企業	1,200,000
＊寄付金	医療関連企業	600,000
	一般企業	200,000
＊広告料		470,000
＊第5回SOFJO参加費（45名）		135,000
＊研修会参加費（27名）		27,000
＊預金利息		4,085
＊前年度繰越金		3090,838
	計	7,069,923

歳出の部　　単位：円

＊日本人交換整形外科医奨学金	300,000
＊通信費	155,859
＊事務費	146,592
＊会議費	7,096
＊第5回SOFJO関連費用	2,449,564
＊人件費	107,300
＊旅費・交通費	64,484
＊雑費	3,075
＊次年度繰越金	3,835,953
計	7,069,923

平成六年度事業費予算編成

歳入の部　　単位：円

＊一般会員		300,000
＊賛助会員	医療関連企業	1,600,000
	一般企業	1,400,000
＊寄付金	医療関連企業	500,000
	一般企業	500,000
＊前年度繰越金		3,835,953
	計	8,135,953

歳出の部　　単位：円

＊日本人交換整形外科医奨学金 渡航費＋滞在費（一部）　300,000×2	600,000
＊フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費、交通費（3カ月）　150,000×2人×3カ月	900,000
＊第二回日仏整形外科合同会議　開催費援助	700,000
＊日仏整形外科学会関連事業　表彰など	200,000
＊日仏共同研究、研究助成	500,000
＊日仏整形外科学会事務局（通信、会合、人件、印刷費）	1,000,000
＊予備費	100,000
＊次年度繰越金	4,135,953
計	8,135,953

AFJOフランス側事務局の役員変更について

AFJO設立当初から会長を務められたPicault先生が名誉会長に勇退され、新しくCourpied教授が会長に就任されました。これに伴いフランス側事務局の役員が以下のように変更になりました。名誉会長であったMichel教授は名誉会長職を辞任されておられます。

日本側の事務局は、大阪市立大学の大橋弘嗣先生が新たに書記として本会の活動をご援助いただくこととなりました。大橋先生はすでに会報第3巻から会報編集を担当していただいております。

また日仏整形外科学会（SOFJO）の役員会は、長年にわたる両国の学術的、文化的交流への多大なる功績に対して、Picault先生を日仏整形外科学会の名誉会員とすることを決定しました。

新事務局

	（フランス側）		日本側	
名誉会長	Ch. PICAULT (Lyon)	会長	七川歓次	
会長	J. P. COURPIED (Paris)	副会長	菅野卓郎	小野村敏信
副会長	R. KOHLER	書記長	小林晶	
書記長	M. CHASSARD	書記・会計	瀬本喜啓	大橋弘嗣
会計	L. M. COLLET			

Courpied先生からのメッセージ

今回の兵庫県南部地震に際し、AFJOフランス側会長 J. P. Courpied先生より日本側会長 七川先生ならびに会員の皆様へメッセージをいただきました。

Meilleures pensées, notamment pour les membres de l'A. F. J. O. et leur famille en ces moments difficiles pour le JAPON.

（日本の今回の震災に際し、日仏整形外科学会会員およびそのご家族の皆様のことを心より心配いたしております。）

フランス人青年整形外科医の交換研修受入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFCOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施致します。現在までに日本側では39ケ所の施設で受け入れを承諾頂いておりますが、来年以降さらに日本側の受け入れ体制を充実しフランス側に提示したいと考えております。受入期間は原則として3ヵ月ですが、1ヵ月でも2ヵ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話すことが条件になっております。また日仏間の旅費はSOFCOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費、旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設）が負担することになっております。受入れを承諾していただける場合は別紙の受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付下さい。現在までに受け入れを御承諾いただいた施設は右記のごとくです。これらの施設の先生がたは、受け入れ条件等の変更がありましたら御連絡ください。変更がないようでしたらあらためて承諾書をお書きいただく必要はありません。登録漏れや誤りがありましたら、事務局まで御一報ください。

また日本から派遣する医師の募集を行っております。お心当たりの先生がおられましたらご応募いただくようお勧め下さい。

日仏整形外科学会 仏人青年整形外科医受け入れ施設一覧

施設名	受入責任者名
国立大阪南病院	村田　紀和
東海大学医学部附属病院 整形外科	福田　宏明
金沢大学医学部附属病院 整形外科	富田　勝郎
浜松医科大学 整形外科	井上　哲郎
長崎大学医学部 整形外科	岩崎　勝郎
札幌医科大学 整形外科	石井　清一
広島大学医学部 整形外科	生田　義和
滋賀県立小児保健医療センター	笠原　吉孝
北里大学医学部　整形外科	塚本　行男
宮崎医科大学 整形外科	田島　直也
大阪医科大学 整形外科	小野村敏信
産業医科大学 整形外科	鈴木　勝巳
順天堂大学 整形外科	山内　裕雄
九州厚生年金病院	上崎　典雄
順天堂浦安病院	一青　勝雄
岡山大学医学 整形外科	井上　一
弘前大学 整形外科	原田　征行
旭川医科大学 整形外科	竹光　義治
東京逓信病院整形外科 関節鏡研修センター	池内　宏
福岡市立こども病院・感染症センター	藤井　敏明
福岡整形外科病院	小林　晶
自治医科大学整形外科教室	大井　淑男
徳島大学医学部 整形外科	井形　高明
神戸大学医学部 整形外科	水野　耕作
財団法人　新潟手の外科研究所	田島　達也
岩手医科大学 整形外科	阿部　正隆
北海道大学医学部 整形外科	金田　清志
慶應大学医学部 整形外科	矢部　裕
熊本整形外科病院	坂口　満
北里大学医学部 整形外科	糸満　盛憲
東京女子医科大学附属 膠原病リウマチ痛風センター	井上　和彦
獨協医科大学 整形外科	早乙女紘一
京都府立医科大学 整形外科	平澤　泰介
愛知医科大学	丹羽　滋郎
九州大学 整形外科	杉岡　洋一
近畿大学医学部 整形外科	田中　清介
山口大学医学部 整形外科	河合　伸也
滋賀医科大学 整形外科	福田　真輔
島根医科大学 整形外科	廣谷　速人

様式1

フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書
（日仏整形外科学会 交換研修プログラムによる）

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。（すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。）

受け入れ責任者

受け入れ施設名

住　所

電話番号　（　　）
専門分野

受入条件（該当する項目の□内にチェックして下さい）

＊受け入れ可能な期間（原則としては3カ月間です）
□ 3カ月間　□ 2カ月間　□ 1カ月間　□ 何カ月でもよい
□ その他（　　）

＊受け入れ可能な時期
□　　月から　　月まで　□　　月を除く　□ 常時受け入れる
□ その他（具体的に　　）

＊受け入れ可能な人数
□ 年間1人　□ 年間2人　□ 年間3人以上
□ その他（　　）
□ 同一時期に1人　□ 同一時期に2人以内　□ 同一時期に3人以上
□ その他（　　）

＊宿泊設備について
□ 宿泊設備を無料で利用可能　□ 宿泊設備を有料で利用可能（1日　　円）
□ 宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する
□ 宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない
□ その他（　　）

＊食事について
□ 施設内で食事を用意する　□ 施設内で食事の準備はしないが食費を支給する
□ 一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する
□ その他（　　）

＊交通費について（宿泊場所から研究施設まで交通機関を使用する場合に限る）
□ 交通費を支給する　□ 交通費は支給しない
□ その他（　　）

＊その他
□ 日本国内の学会等への参加費を援助する
□ その他（　　）

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成　　年　　月　　日

受入責任者氏名　　印

キリトリ線

第4回日仏整形外科合同会議

La 4e Réunion de L'A.F.J.O.

La 4e réunion de l'Association France Japon D'Orthopédie

この度、下記の要領で第4回の日仏整形外科合同会議（4e réunion de l'AFJO）を開催いたします。会員の先生方のご援助をお願いいたします。

1）日　時：平成8年4月14日（日）
2）場　所：高輪プリンスホテル
　　日整会に合わせて開催いたします。

参加方法や演題募集については、後日お知らせいたします。

第4回日仏整形外科合同会議　実行委員会
委員長　七　川　歓　次
（日仏整形外科学会　会長）

編集後記

この度の兵庫県南部地震で被災されました皆様に謹んでお見舞いを申し上げます。
一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。

昨年はパリで第3回AFJOが開催されました。今回お願いいたしました諸先生方の原稿からは、この学会の盛会さそしてパーティー等での楽しさが伝わってまいりました。震災後で明るい話題の少ない昨今、このアンフォが少しでも楽しい話題の提供になればと思います。

本年の第6回日仏整形外科学会の会場が神戸から大阪に変更になりました。ご注意をお願いいたします。

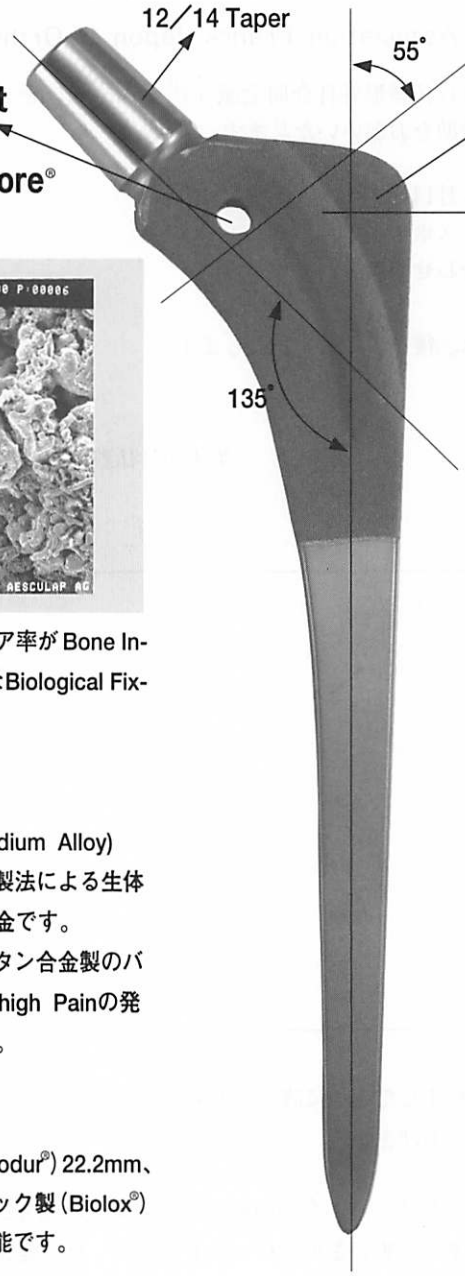
係　大橋　（大阪市立大学整形外科）

AESCULAP®

NEW

BiCONTACT® Prosthesis Stem

…バイコンタクト【骨温存型】セメントレス・ステム…



Positioning Socket

Coating : Plasmapore®

(Vacuum Plasma Spray)

● 最適なポアサイズ及びポア率がBone Ingrowthを促進し、永続的なBiological Fixationを達成します。

Material : Isotan®

(Titanium/Aluminium/Vanadium Alloy)

● エースクラップ社独自の製法による生体親和性に優れたチタン合金です。

● 優れた弾性係数を持つチタン合金製のバイコンタクト・ステムはThigh Painの発生を効果的に防止します。

Head Availability

● コバルトクロム合金製(Isodur®) 22.2mm、28mmヘッド及びセラミック製(Biolox®) 28mmヘッドの使用が可能です。

Anti-rotation Wing

●回旋防止用ウィング

Lateal Support Wing

●ステムの沈み込み（Sinking）及び傾き（Tilting）防止用ウィング

ニューコンセプト

【骨温存型ステム】

●バイコンタクトステムは、手術によって損なわれる骨量を最小限に留め、且つ安定した長期臨床成績を得ることを目的に開発された「骨温存型」セメントレスステムです。

1.荷重伝達時の骨皮質への荷重負担を軽減

↓

よりアナトミカルな荷重伝達の再現

2.ステム挿入時に、温存された海綿骨を圧迫／圧縮

↓

効果的なBone Ingrowthの促進

Clinical Start : 1987～

信頼の実績：ヨーロッパに於ける、50,000件以上の症例実績

承認番号：04B輸第1243号

※詳しい資料は下記までにご請求下さい。

輸入販売元

エースクラップ ジャパン株式会社

人工関節プロジェクト部

〒113 東京都文京区本郷3-19-4 本郷大関ビル7F

TEL：(03)3814-2524 FAX：(03)3814-3734

信頼の選択

■特　性

- ●腸球菌、緑膿菌をも含む広い抗菌スペクトル
- ●各種抗菌剤との相乗的殺菌作用
- ●良好な尿中排泄および胆汁中・組織内移行
- ●優れた臨床成績
- ●副作用発現率は2.1%(474例/22,057例)

■効能・効果

緑膿菌、変形菌、肺炎桿菌、霊菌、大腸菌、エンテロバクター、シトロバクター、インフルエンザ菌、ブドウ球菌、連鎖球菌、肺炎球菌、腸球菌、バクテロイデスのうち本剤感受性菌株による下記感染症

●敗血症●気管支炎、気管支拡張症にともなう感染、肺炎、慢性呼吸器疾患の二次感染、肺化膿症、膿胸●胆管炎、胆のう炎●腎盂腎炎、膀胱炎●化膿性髄膜炎●子宮付属器炎、子宮内感染、骨盤死腔炎、子宮旁結合織炎、バルトリン腺炎

■使用上の注意

本剤の使用にあたっては、耐性菌の発現等を防ぐため、原則として感受性を確認し、疾病の治療上必要な最少限の期間にとどめること。

1.一般的注意
(1)ショックがあらわれるおそれがあるので、十分な問診を行うこと。なお、事前に皮膚反応を実施することが望ましい。(2)ショック発現時に救急処置のとれる準備をしておくこと。また、投与後患者を安静の状態に保たせ、十分な観察を行うこと。

2.次の患者には投与しないこと
(1)本剤の成分によるショックの既往歴のある患者(2)伝染性単核症の患者(3)既往にリドカイン又はアニリド系局所麻酔剤に対する過敏症を起こした患者(筋注用のみ)

3.次の患者には投与しないことを原則とするが、特に必要とする場合には慎重に投与すること
本剤の成分又はペニシリン系抗生物質に対し過敏症の既往歴のある患者

4.次の患者には慎重に投与すること
(1)セフェム系抗生物質に対し過敏症の既往歴のある患者(2)本人又は両親兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質を有する患者(3)高度の腎障害のある患者(4)経口摂取の不良な患者又は非経口栄養の患者、全身状態の悪い患者(ビタミンK欠乏症状があらわれることがあるので観察を十分に行うこと。)(5)出血素因のある患者(6)肝障害のある患者(7)高齢者(「高齢者への投与」の項参照)

5.副作用
(1)ショック:まれにショック症状を起こすことがあるので、観察を十分に行い、不快感、口内異常感、喘鳴、眩暈、便意、耳鳴等の症状があらわれた場合には、投与を中止すること。

合成ペニシリン製剤 指 要指

ペントシリン® Pentcillin
注射用 1g・2g・4g
筋注用 1g
点滴用 4g
〔日抗基:注射用ピペラシリンナトリウム〕

※用法・用量、その他の使用上の注意等は、添付文書をご覧ください。

(資料請求先)
製造 富山化学工業株式会社
〒160 東京都新宿区西新宿3-2-5
販売 富山化学工業株式会社 三共株式会社

1994.7作成A5タテ

Surgam

鎮痛・抗炎症剤〈薬価基準収載〉
〈チアプロフェン酸製剤〉

劇指 スルガム®
錠(100mg)・200mg錠

●効能・効果※
下記疾患ならびに症状の消炎・鎮痛
慢性関節リウマチ、変形性関節症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腰痛症、手術後及び外傷後の消炎・鎮痛の場合
下記疾患の解熱・鎮痛
急性上気道炎(急性気管支炎を伴う急性上気道炎を含む)
手術後および外傷後の消炎・鎮痛

●用法・用量※
慢性関節リウマチ、変形性関節症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群、腰痛症、手術後及び外傷後の消炎・鎮痛の場合
錠：通常、成人1回2錠(チアプロフェン酸として200mg)、1日3回経口投与する。
頓用の場合は1回2錠経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。
200mg錠：通常、成人1回1錠(チアプロフェン酸として200mg)、1日3回経口投与する。
頓用の場合は1回1錠経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。
急性上気道炎(急性気管支炎を伴う急性上気道炎を含む)の解熱・鎮痛の場合
通常、成人にはチアプロフェン酸として1回量200mgを頓用する。なお、年齢、症状により適宜増減する。ただし、原則として1日2回までとし、1日最大600mgを限度とする。また、空腹時の投与は避けさせることが望ましい。

(使用上の注意)※
(1)一般的注意※
1)消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。
2)慢性疾患(慢性関節リウマチ、変形性関節症等)に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
ア)長期投与する場合には定期的に臨床検査(尿検査、血液検査及び肝機能検査等)を行うこと。また異常が認められた場合には減量、休薬等の適切な措置を講ずること。
イ)薬物療法以外の療法も考慮すること。
3)急性疾患に対し本剤を用いる場合には、次の事項を考慮すること。
ア)急性炎症、疼痛、発熱の程度を考慮し投与すること。
イ)原則として同一の薬剤の長期投与を避けること。
ウ)原因療法があればこれを行うこと。
4)※患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。過度の体温下降、虚脱、四肢冷却等があらわれることがあるので、特に高熱を伴う小児及び高齢者又は消耗性疾患の患者においては、投与後の患者の状態に十分注意すること。
5)感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染による炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に投与すること。
6)他の消炎鎮痛剤との併用は避けることが望ましい。
7)高齢者及び小児には副作用の発現に特に注意し、必要最小限の使用にとどめるなど慎重に投与すること。

(2)次の患者には投与しないこと※
1)消化性潰瘍のある患者
2)重篤な血液の異常のある患者
3)重篤な肝障害のある患者
4)重篤な腎障害のある患者
5)重篤な心機能不全のある患者
6)本剤の成分に過敏症の患者
7)アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者
8)※妊娠末期の婦人

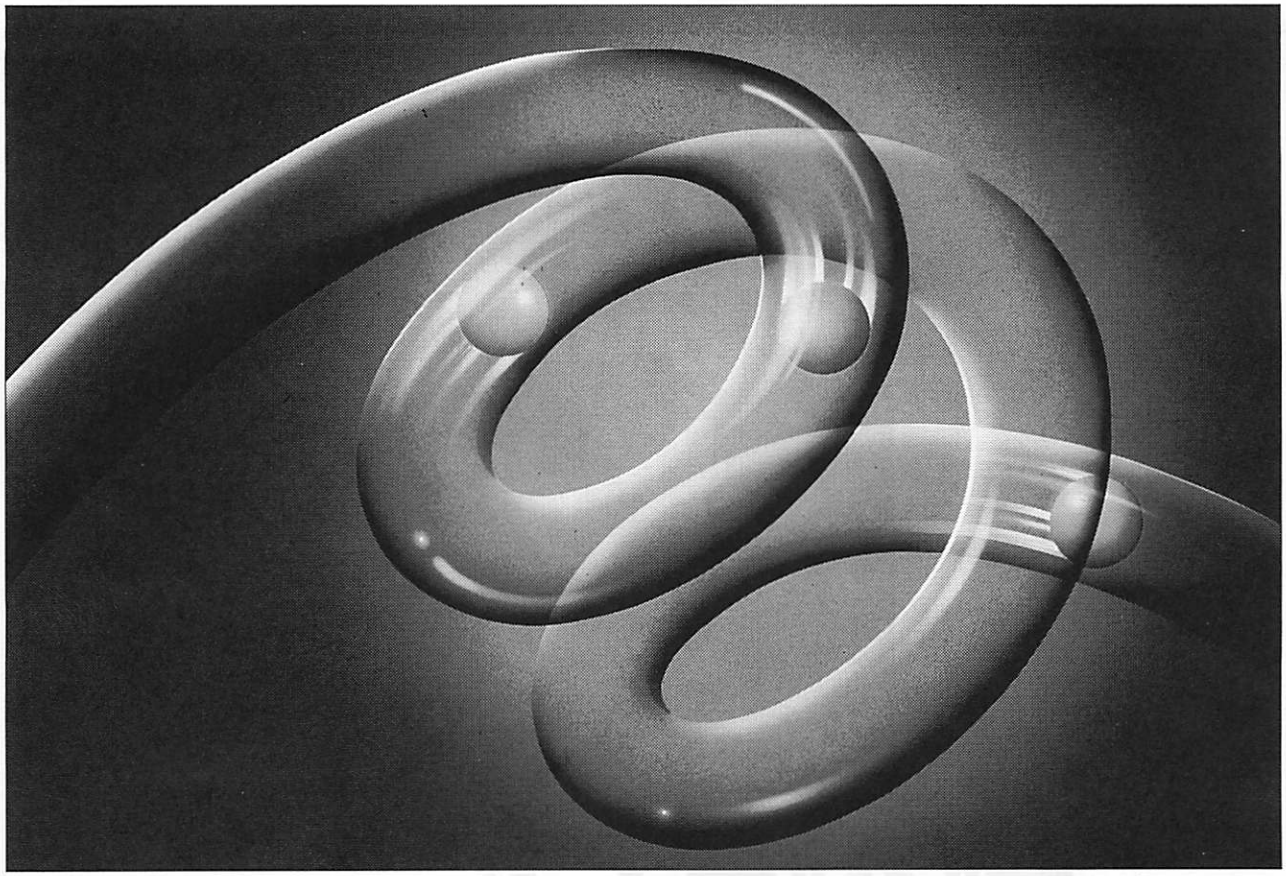
(3)次の患者には慎重に投与すること※
1)消化性潰瘍の既往歴のある患者
2)血液の異常又はその既往歴のある患者
3)※出血傾向のある患者(血小板機能異常がおこることがある。)
4)肝障害又はその既往歴のある患者
5)腎障害又はその既往歴のある患者
6)心機能障害のある患者
7)過敏症の既往歴のある患者
8)気管支喘息のある患者
9)※高齢者

(4)相互作用※
1)※次の医薬品の作用を増強することがあるので、併用する場合にはその医薬品を減量するなど慎重に投与すること。
クマリン系抗凝固剤(ワルファリン等)
カリウム製剤
2)※次の医薬品の作用を減弱することがある。
チアジド系利尿剤
3)※リチウムとの併用により血中リチウム濃度が上昇し、リチウム中毒を呈したとの報告があるので、併用する場合には観察を十分に行い、慎重に投与すること。
4)※オフロキサシン等のニューキノロン系抗菌剤との併用により痙攣を起こすおそれがあるので、慎重に投与すること。

(5)副作用※
1)消化器
まれに消化性潰瘍・胃腸出血等があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止し適切な処置を行うこと。また、ときに嘔吐、胃部不快感、腹痛、食欲不振、胃重感、胸やけ、下痢、口内炎、まれに胃炎、腹部膨満感、便秘、舌のあれ、口角炎、口渇、唾液分泌亢進等があらわれることがある。
2)ショック
まれにショックがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、胸内苦悶、呼吸困難、冷汗、血圧低下、頻脈等があらわれた場合には、投与を中止し適切な処置を行うこと。
3)過敏症※
ときに発疹、また、まれに光線過敏症、紅斑、瘙痒、喘息発作等があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
4)精神神経系
まれに眠気、めまい、ふらつき感、頭痛等があらわれることがある。
5)循環器
まれに頻脈があらわれることがある。
6)血液※
ときに貧血、白血球増多、また、まれに白血球減少、血小板機能低下(出血時間の延長)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
7)肝臓
ときにGOT、GPT、AI-P上昇等があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
8)腎臓※
ときに浮腫、BUN上昇、また、まれに高カリウム血症、蛋白尿があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
9)耳
まれに耳鳴り、耳づまり感があらわれることがある。
10)その他
まれに脱力感、倦怠感、ほてり、胸痛、味覚異常、舌のしびれ、尿糖があらわれることがある。
(6)高齢者への投与
高齢者では、副作用があらわれやすいので、少量から投与を開始するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること(「一般的注意」の項参照)。
(7)妊婦・授乳婦への投与※
1)妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。
2)※妊娠末期のラットに投与した実験で、分娩遅延及び胎仔の動脈管収縮が報告されているので、妊娠末期の婦人には投与しないこと。
3)※ラットで乳汁への移行が報告されているので、授乳婦への投与は避け、やむを得ず投与する場合は授乳を避けさせること。
(8)小児への投与
小児に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。
(9)その他
外国において、本剤の投与により泌尿器症状(膀胱痛、排尿困難、頻尿)、血尿、膀胱炎があらわれたとの報告がある。

●ご使用に際しては添付文書をご参照ください。
※ 1994年9月改訂

資料請求先は
エーザイまたは森下ルセル
発売元 エーザイ 東京都文京区小石川4-6-10
提携先 森下ルセル 大阪市中央区道修町3-3-8
製造元 日本ルセル 東京都中央区日本橋室町4-1-21
D-I19609



慢性動脈閉塞症における四肢潰瘍ならびに安静時疼痛の改善に血行再建術後の血流維持に

劇 指 要指

注射用

プロスタグランジンE1製剤

プロスタンディン®

薬価基準収載

注射用アルプロスタジル アルファデクス

■効能・効果：I. 動脈内投与 慢性動脈閉塞症（バージャー病、閉塞性動脈硬化症）における四肢潰瘍ならびに安静時疼痛の改善　II. 静脈内投与 1）振動病における末梢血行障害に伴う自覚症状の改善ならびに末梢循環・神経・運動機能障害の回復 2）血行再建術後の血流維持 3）動脈内投与が不適と判断される慢性動脈閉塞症（バージャー病、閉塞性動脈硬化症）における四肢潰瘍ならびに安静時疼痛の改善。

■使用上の注意（抜粋）：1. 一般的注意 1）本剤による治療は対症療法であり投与中止後再燃することがあるので注意すること。2）慢性動脈閉塞症における四肢潰瘍の改善を治療目的とする場合、静脈内投与は動脈内投与に比し治療効果がやや劣るので、動脈内投与が非適応と判断される患者（高位血管閉塞例など）又は動脈内投与操作による障害が、期待される治療上の効果を上まわると判断される患者に行うこと。2. 次の患者には投与しないこと 1）重篤な心不全のある患者 2）妊婦又は妊娠している可能性のある婦人 3）本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

●その他の使用上の注意、及び用法・用量等詳細は添付文書をご参照ください。

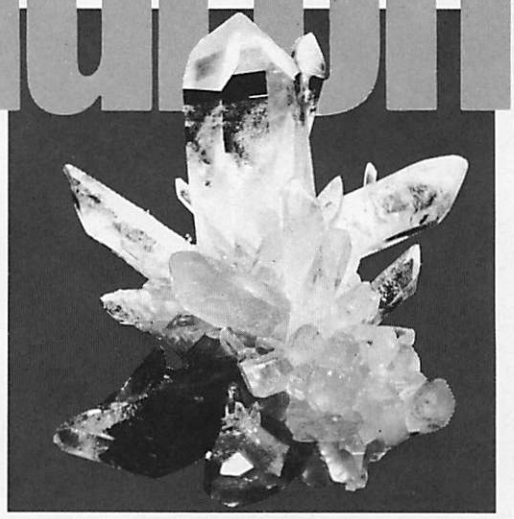
資料請求先

小野薬品工業株式会社
〒541 大阪市中央区道修町2丁目1番5号

940225

住友製薬

Didronel®



劇 指 要指 **骨代謝改善剤** エチドロン酸 ニナトリウム錠 薬価基準収載

ダイドロネル®錠200

効能・効果

- 下記状態における初期及び進行期の異所性骨化の抑制
  脊髄損傷後、股関節形成術後
- 骨ページェット病

用法・用量

本剤の吸収をよくするため、服薬前後2時間は食物の摂取を避けること。

- 下記状態における初期及び進行期の異所性骨化の抑制
  脊髄損傷後、股関節形成術後
  通常、成人には、エチドロン酸　ニナトリウムとして800～1000mgを1日1回、食間に経口投与する。
  なお、年齢、症状により適宜増減する。
- 骨ページェット病
  通常、成人には、エチドロン酸　ニナトリウムとして200mgを1日1回、食間に経口投与する。
  なお、年齢、症状により適宜増減できるが、1日1000mgを超えないこと。

使用上の注意

1. 一般的注意

- 骨ページェット病の場合
  (1)X線写真、骨シンチグラフィー、生化学指標(血清アルカリフォスファターゼ、尿中ハイドロキシプロリン)、骨生検、臨床症状から骨ページェット病と確定診断された患者にのみ投与すること。
  (2)本剤は骨の代謝回転を抑制し、骨形成の過程で類骨の石灰化遅延を起こすことがある。この作用は、投与量と投与期間に依存しているので、次のことを守ること。
  通常用量(200mg/日:2.5～5mg/kg相当)の場合、投与期間は6ヵ月を超えないこと。
  また200mg/日の投与量を超える場合、投与期間は3ヵ月を超えないこと。
  (3)再治療は少なくとも3ヵ月の休薬期間をおき、生化学所見、症状あるいはその他の所見で、症状の進行が明らかな場合にのみ行うこと。
  (4)本剤を投与中に長管骨骨折が発生した場合は、化骨の癒合がみられるまで投与を中止することが望ましい。
  (5)患者には適切な栄養状態、特にカルシウムとビタミンDの適切な摂取を保持するように指導すること。
- 下記状態における初期及び進行期の異所性骨化の抑制
  脊髄損傷後、股関節形成術後　の場合
  (1)本剤は骨化の初期に近い程効果が期待出来るので、投与に際しては、次の点を考慮すること。
  1)脊髄損傷の場合：異所性骨化の初期と思われる局所の炎症所見(腫脹・熱感・疼痛)を認めた時点で投与を開始することが望ましい。
  2)股関節形成術の場合：手術直後から投与を開始することが望ましい。
  (2)通常用量(800～1000mg/日：15～20mg/kg相当)の場合、投与期間は3ヵ月を超えないこと。
  (3)脊髄損傷患者で脊椎を骨移植で固定する術式の場合、本剤投与中に移植骨の癒合が遅延した例があるので、固定を優先する方が患者にとって望ましいと考えられる場合には、投与を避けること。
  (4)本剤を投与中に長管骨骨折が発生した場合は、化骨の癒合がみられるまで投与を中止することが望ましい。

2. 次の患者には投与しないこと
  (1)重篤な腎障害のある患者
  (2)骨軟化症のある患者
  (3)妊婦又は妊娠している可能性のある婦人(「妊婦、授乳婦への投与」の項参照)
  (4)小児(「小児への投与」の項参照)

3. 次の患者には慎重に投与すること
  (1)腎障害のある患者
  (2)消化性潰瘍、腸炎のある患者

4. 相互作用
  本剤はカルシウム等と錯体を作ること、また動物実験で非絶食投与により、吸収が低下することが確認されているので、本剤の投与前後2時間以内は次のことを避けること。
  (1)食物、特に牛乳や乳製品のような高カルシウム食の摂取
  (2)カルシウム、鉄、マグネシウム、アルミニウムのような金属を多く含むミネラル入りビタミン剤又は制酸剤の服用

5. 副作用
  ••(1)消化器：ときに腹部不快感、下痢、軟便、嘔気、嘔吐、腹痛、食欲不振、胸やけ、便秘、また、口内炎(舌あれ、口臭等)があらわれることがある。
  (2)過敏症：ときに発疹、また、まれに血管浮腫、蕁麻疹、蕁痒等の症状があらわれることがある。このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
  (3)その他：ときに発熱、頭痛、咽喉灼熱感があらわれることがある。

•6. 高齢者への投与
  一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

7. 妊婦、授乳婦への投与
  (1)ラット(SD系)における器官形成期投与試験において、高用量で胎仔の骨格異常の発生が報告されているので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないこと。
  (2)動物実験で母乳中へ移行することが報告されているので、投与中は授乳を避けさせること。

••8. 小児への投与
  小児における骨成長に影響を与える可能性があり、また、小児において10～20mg/kg/日の長期投与により、くる病様症状があらわれたとの報告があり、安全性が確立していないので投与しないこと。

9. その他
  (1)動物実験において、高用量を長期間投与したとき、類骨の石灰化遅延に随伴した骨髄の異常が認められたとの報告がある。
  (2)●骨ページェット病の場合
  1)血中無機リンの上昇がみられることがあるが、臨床上とくに有害な作用は認められず、投与中止により正常に復する。
  正常上限を越える高値の場合は、本剤の過剰投与の可能性があるので注意すること。
  2)大量投与又は長期間投与により骨痛、骨折の発生率が増加したとの報告がある。
  ●下記状態における初期及び進行期の異所性骨化の抑制
  脊髄損傷後、股関節形成術後　の場合
  血中無機リンの上昇がみられることがあるが、臨床上とくに有害な作用は認められず、投与中止により正常に復する。

(••1994年7月改訂)(•1993年10月改訂)

■その他については添付文書をご覧ください。

製造発売元　　(資料請求先)
住友製薬株式会社
〒541 大阪市中央区道修町2丁目2番8号

Trademark and product under license from Procter & Gamble Pharmaceuticals. Inc., U.S.A.

DID-2(1994年8月作成)

効能・効果

気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、ケロイド・肥厚性瘢痕

使用上の注意(抜粋)

(1)一般的注意

1）本剤は、気管支拡張剤、ステロイド剤、抗ヒスタミン剤等と異なり、すでに起こっている発作や症状を速やかに軽減する薬剤ではないので、このことは患者に十分説明しておく必要がある。

2）気管支喘息患者に本剤を投与中、大発作をみた場合は、気管支拡張剤あるいはステロイド剤を投与する必要がある。

3）本剤による膀胱炎様症状、肝機能異常が出現する場合には、末梢血中好酸球増多を伴うことが多いので、本剤投与中は定期的に血液検査（特に白血球数・好酸球%の検査）を行うことが望ましい。
好酸球数が増加した場合には、十分な経過観察を行うこと。

4）長期ステロイド療法を受けている患者で、本剤投与によりステロイドの減量をはかる場合は十分な管理下で徐々に行うこと。

5）本剤の投与によりステロイド維持量を減量し得た患者で、本剤の投与を中止する場合は、原疾患再発のおそれがあるので、注意すること。

6）本剤投与により効果が認められない場合には、漫然と長期にわたり投与しないように注意すること。

(2)次の患者には投与しないこと
妊婦(特に約3ヵ月以内)又は妊娠している可能性のある婦人

(3)次の患者には慎重に投与すること
肝障害又はその既往歴のある患者

本剤使用に当って

本剤を季節性のアレルギー性疾患患者に投与する場合は、好発季節を考えて、その直前から投与を開始し、好発季節終了時までつづけることが望ましい。

※上記以外の使用上の注意、用法・用量等の詳細は、製品添付文書をご参照下さい。

リザベンの特性(ケロイド・肥厚性瘢痕)

1. Profile of Rizaben
唯一の経口ケロイド・肥厚性瘢痕治療剤

2. Clinical Benefit
ケロイド・肥厚性瘢痕の自覚症状(瘙痒、疼痛)を軽減し、他覚所見(潮紅、硬結、増大傾向等)を改善

3. Mode of Action
サイトカイン(TGF-β1)、各種ケミカルメディエーター、活性酸素の遊離・産生を抑制(*in vitro*)

4. Pharmacological Effects
線維芽細胞のコラーゲン合成を抑制(*in vitro*)

5. Adverse Effects
アレルギー性疾患を含む副作用発現率は2.4%(ケロイド・肥厚性瘢痕では9.8%)

アレルギー性疾患治療剤
ケロイド・肥厚性瘢痕治療剤

リザベン®

カプセル・細粒・ドライシロップ

指 一般名 トラニラスト 薬価基準収載

資料請求先 キッセイ薬品工業株式会社
松本市芳野19番48号

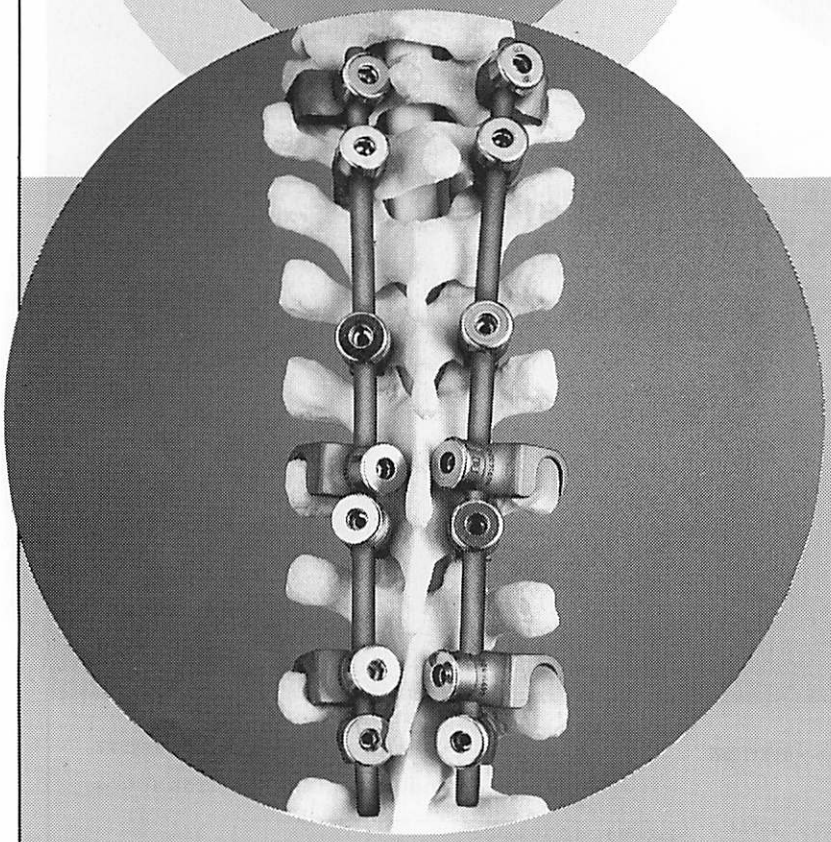
RZK002FJ

医療に貢献、社会に奉仕

DIAPASON

ディアパゾン胸・腰椎固定システム

DIMSO
Subsidiary of
stryker
米国　ストライカー社

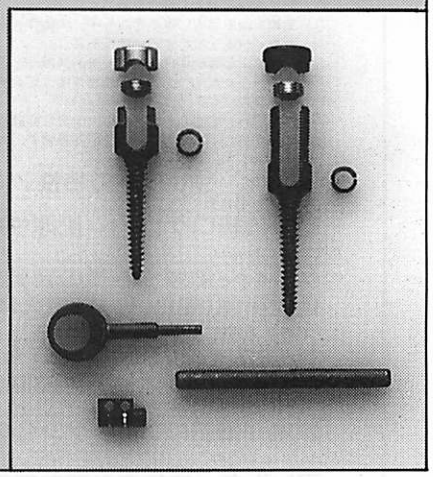


- ペディクルスクリューによる固定
- 広範な適応
- チタニウム合金
- 手技が容易
- 最小限の専用手術器械

信頼性へのシンプルな選択。

ディアパゾンはチタン合金製の新しいタイプのペディクルスクリューシステムです。独自のジョイントシステムと最小限の手術器械でよりフレキシブルな胸・腰椎の矯正及び固定を可能にしました。

承認番号：4B輸第735号

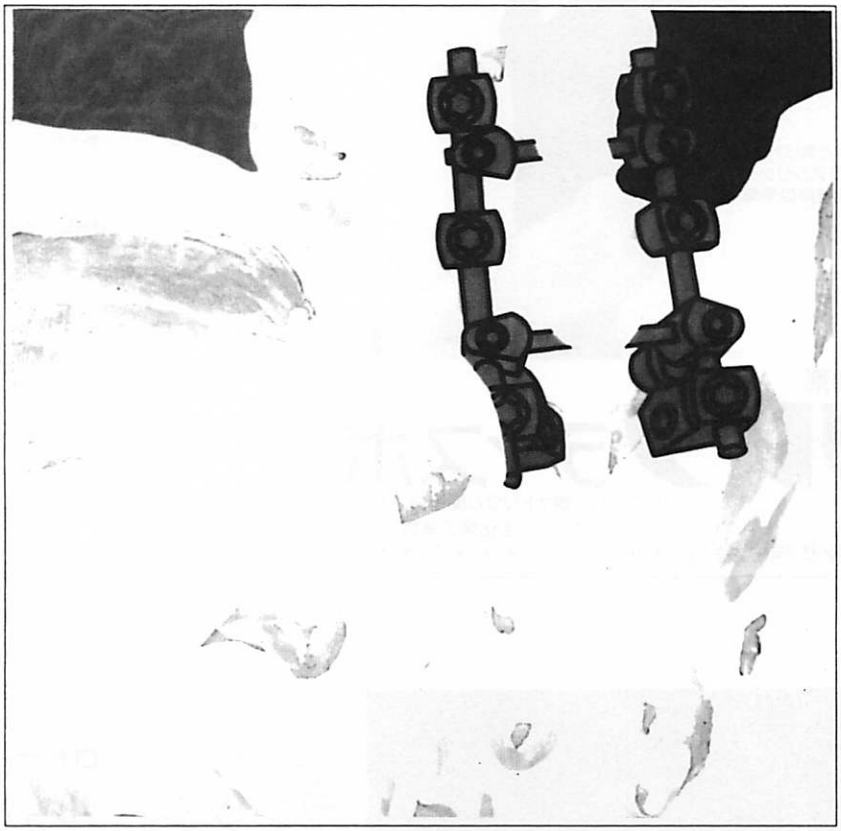


日本総代理店
株式会社松本医科器械
MATSUMOTO MEDICAL INSTRUMENTS, INC.
●本社/541 大阪市中央区淡路町2丁目4-7 TEL(06)203-7651 FAX(06)226-1713
●東京支店/TEL(03)3814-6683 FAX(03)3815-4341●札幌(011)727-8981●仙台(022)234-4511●横浜(045)423-3911●名古屋(052)264-1481
●金沢(0762)23-5221●広島(082)293-3610●福岡(092)474-1191●浦和(048)825-2110

SOFAMOR
™THE SPINE SPECIALIST™

COMPACT CD
L O W B A C K

コンパクトCD スパイナルシステム



TITANIUM **STAINLESS**

腰・仙・腸骨の確実な固定が出来るシステムです。

- ショパンサクラルブロックにより、SIのダブルスクリュー固定が簡単に出来ます。
- ロッキングプラグワッシャーを使用した確実な固定。
- スクリューヘッドをコンパクトに使用した為、ファセットにかからず、骨移植母床も広くとれます。
- 最少の手術器械点数で腰・仙・腸骨固定術が可能です。
- チタン製のシステム追加により、CT・MRIにも対応出来ます。

小林メディカル

承認番号・ステンレスインプラント及び手術器械
4BY0919 コンパクトC.D脊椎後方固定手術器械
・チタンインプラント
5BY0950 コンパクトC.D脊椎後方固定用インプラント

発売元 小林製薬株式会社 小林メディカル事業部

本　社　〒541 大阪市中央区淡路町4-4-13 南星ビル8F
TEL.06-222-3029　FAX.06-222-7228
札　幌　〒060 札幌市中央区大通西17-1-5 ノワム大通ビル6F
TEL.011-622-4361　FAX.011-622-4363
東京第一　〒135 東京都江東区平野2-2-4
TEL.03-3820-1408　FAX.03-3820-1409
東京第二　〒135 東京都江東区平野2-2-4
TEL.03-3820-1408　FAX.03-3820-1409
東京第三　〒135 東京都江東区平野2-2-4
TEL.03-3820-1408　FAX.03-3820-1409
名古屋　〒460 名古屋市中区千代田2-14-13 鵜飼ビル4F
TEL.052-242-5201　FAX.052-262-3558
大　阪　〒541 大阪市中央区道修町4-7-6 シオノギ道修町ビル1F
TEL.06-223-0751　FAX.06-223-0627
広　島　〒731-51 広島市佐伯区楽々園4-3-22 栄泉楽々園ビル4F
TEL.0829-21-6671　FAX.0829-21-6672
福　岡　〒810 福岡市中央区白金2-11-9 福岡朝日・DICビル10F
TEL.092-522-2818　FAX.092-522-2651

科研製薬

●関節軟骨を被覆・保護し、潤滑能を改善します。
●腱の癒着を防止し、関節の拘縮を改善します。
●病的関節液の性状を改善します。
●関節軟骨の変性を抑制します。

（効能・効果）変形性膝関節症、肩関節周囲炎

（使用上の注意）——抜粋——

1. 一般的注意
(1)変形性膝関節症で関節に炎症が著しい場合は、本剤の投与により局所炎症症状の悪化を招くことがあるので、炎症症状を除去してから本剤を投与することが望ましい。
(2)本剤の投与により、ときに局所痛があらわれることがあるので、投与後の局所安静を指示する等の措置を講じること。
(3)関節腔外に漏れると疼痛を起こすおそれがあるので、関節腔内に確実に投与すること。

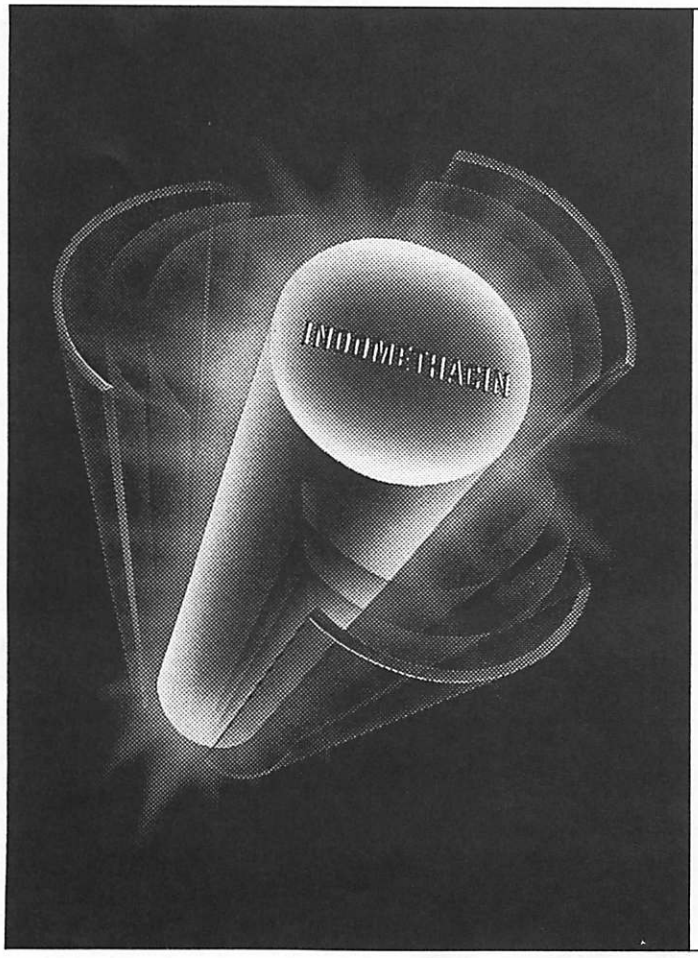
2. 次の患者には投与しないこと
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 次の患者には慎重に投与すること
(1)他の薬剤に対して過敏症の既往歴のある患者
(2)肝障害又はその既往歴のある患者
4. 副作用
(1)過敏症
まれに発疹、蕁麻疹、瘙痒感等があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
(2)投与関節
ときに疼痛（主に投与後の一過性の疼痛）、まれに水腫、熱感、局所の重苦しさがあらわれることがある。
5. 高齢者への投与
一般に高齢者では生理機能が低下しているので注意すること。

用法・用量、使用上の注意等の詳細は、添付文書をご参照下さい。

関節機能改善剤
指 アルツディスポ®
（ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液）

（資料請求先）〒103 東京都中央区日本橋本町4-8-14 科研製薬株式会社 学術部
（製造元）生化学工業株式会社 東京都中央区日本橋本町2-1-5



インドメタシンプロドラッグ
ランツジールコーワは——

●優れた消炎・鎮痛・解熱作用をあらわす。
●消化管への影響が少ない。
●頭痛・めまいなど、中枢系への影響が少ない。
●投与期間の延長に伴う副作用の多発傾向は認められない。
●服用しやすい小型の錠剤である。

RANTUDIL KOWA®

劇 指 要指 非ステロイド抗炎症・鎮痛・解熱剤
ランツジール®コーワ錠

●効能・用法・注意等は添付文書等をご参照下さい。

Kowa 販売元 興和新薬株式會社

注射用セフェム系抗生物質製剤

指 要指 **パンスポリン®**

静注用 0.25g・0.5g・1g・1g（キット品）
筋注用 0.25g
（日抗基：注射用塩酸セフォチアム）

■効能・効果、用法・用量、使用上の注意（禁忌）等については、添付文書をご参照ください。

■薬価基準：収載

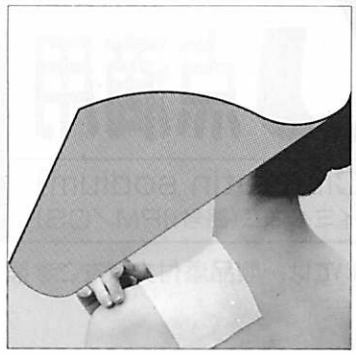
PANSPORIN®

（資料請求先）
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

(1994・6：PanB52-13)

ニューパップ剤は無臭の時代

●しっとりタイプの無臭性



[製品特性]

1. 香料を含まない無臭性の新しいパップ剤です。
2. 経皮吸収性にすぐれ、強い鎮痛・消炎作用を示します。
3. 粘着性にすぐれ、水分含有量が多いパップ剤です。
4. 副作用発現率は2.8%（966例中27例）で、主な副作用は発赤、瘙痒感などいずれも一過性の皮膚症状のみでした。

[効能・効果]
下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
◎変形性関節症◎肩関節周囲炎◎腱・腱鞘炎◎腱周囲炎
◎上腕骨上顆炎（テニス肘等）◎筋肉痛◎外傷後の腫脹・疼痛

[用法・用量] 1日2回患部に貼付する。

[使用上の注意]
(1)一般的注意／❶消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。
❷皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に投与すること。
❸慢性疾患（変形性関節症等）に対し本剤を用いる場合には薬物療法以外の療法も考慮すること。また、患者の状態を十分観察し、副作用の発現に留意すること。
(2)［次の患者には使用しないこと／本剤又は他のフェルビナク製剤に対して過敏症の既往歴のある患者］
3副作用／皮膚：ときに瘙痒、発赤、発疹等の皮膚炎及び刺激感があらわれることがある。これらの症状が強い場合は使用を中止すること。
4妊婦への投与／妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。
5小児への投与／小児に対する安全性は確立していない（使用経験が少ない）。
6適用上の注意／❶損傷皮膚及び粘膜に使用しないこと。
❷湿疹又は発疹の部位に使用しないこと。

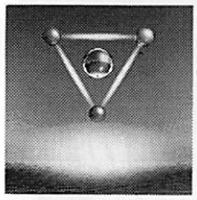
経皮吸収型鎮痛消炎剤（無臭性）
指 **セルタッチ®**
フェルビナク貼付剤　薬価基準収載
Seltouch® Felbinac Pap

製造元 帝國製薬株式会社 〒769-26 香川県大川郡大内町三本松567番地
発売元 日本レダリー株式会社 〒104 東京都中央区京橋一丁目10番3号（資料請求先・学術部）
販売 武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

1994.4

THE STRONG, BALANCED ANTIBACTERIAL AGENT

均整のとれた強い抗菌力



オキサセフェム系抗生物質製剤

指 要指

フルマリン®

静注用0.5g,1g

日抗基 注射用フロモキセフナトリウム 略号 FMOX

●フルマリンは第三世代セフェム系のグラム陰性菌に対する優れた抗菌力を保持しながら,黄色ブドウ球菌をはじめグラム陽性菌にも強い抗菌力を有する均整のとれた抗生物質である。

●PBP-2′を誘導しにくい。

●副作用は2.22%に発現し,その主なものはアレルギー症状と胃腸症状であった。

■効能・効果 ブドウ球菌属,レンサ球菌属(腸球菌を除く),肺炎球菌,ペプトストレプトコッカス属,ブランハメラ・カタラーリス,淋菌,大腸菌,クレブシエラ属,プロテウス属,インフルエンザ菌,バクテロイデス属のうち本剤感性菌による下記感染症○敗血症,感染性心内膜炎○外傷・手術創等の表在性二次感染○咽喉頭炎,扁桃炎,気管支炎,気管支拡張症の感染時,慢性呼吸器疾患の二次感染○腎盂腎炎,膀胱炎,前立腺炎,淋菌性尿道炎○胆のう炎,胆管炎○腹膜炎,骨盤腹膜炎,ダグラス窩膿瘍○子宮付属器炎,子宮内感染,骨盤死腔炎,子宮旁結合織炎,バルトリン腺炎○中耳炎,副鼻腔炎

■使用上の注意(一部抜粋)

本剤の使用にあたっては,耐性菌の発現等を防ぐため,原則として感受性を確認し,疾病の治療上必要な最少限の期間の投与にとどめること。

❶一般的注意 (1)ショックがあらわれるおそれがあるので,十分な問診を行うこと。なお,事前に皮膚反応を実施することが望ましい。(2)ショック発現時に救急処置のとれる準備をしておくこと。また投与後患者を安静の状態に保たせ,十分な観察を行うこと。 **❷次の患者には投与しないこと** 本剤の成分によるショックの既往歴のある患者 **❸次の患者には投与しないことを原則とするが,特に必要とする場合には慎重に投与すること** 本剤の成分又はセフェム系抗生物質に対し過敏症の既往歴のある患者 **❹次の患者には慎重に投与すること** (1)ペニシリン系抗生物質に対し過敏症の既往歴のある患者 (2)本人又は両親,兄弟に気管支喘息,発疹,蕁麻疹等のアレルギー症状を起こしやすい体質を有する患者 (3)高度の腎障害のある患者 (4)経口摂取の不良な患者又は非経口栄養の患者,高齢者,全身状態の悪い患者(ビタミンK欠乏症状があらわれることがあるので観察を十分に行うこと。) **❺相互作用** フロセミド等の利尿剤との併用により腎毒性が増強されるおそれがあるので,併用する場合には慎重に投与すること。 **❻副作用** (1)**ショック** まれにショック症状を起こすことがあるので,観察を十分に行い,不快感,口内異常感,嗄鳴,眩暈,便意,耳鳴,発汗等の症状があらわれた場合には投与を中止すること。(2)**過敏症** 発疹,蕁麻疹,瘙痒,発赤,発熱,顔面紅潮,皮膚感覚異常感等の過敏症状があらわれた場合には,投与を中止し適切な処置を行うこと。(3)**腎臓** まれに急性腎不全等の重篤な腎障害があらわれることがあるので,定期的に検査を行うなど観察を十分に行い,異常が認められた場合には,投与を中止し適切な処置を行うこと。(4)**血液** まれに無顆粒球症,また,ときに赤血球減少,好酸球増多,ヘモグロビン減少,ヘマトクリット減少,血小板減少又は増多があらわれることがあるので,異常が認められた場合には投与を中止し,適切な処置を行うこと。また,他のセフェム系薬剤で溶血性貧血があらわれることが報告されている。(5)**肝臓** S-GOT上昇,S-GPT上昇が,またときにアルカリフォスファターゼ上昇,ビリルビン上昇が,またまれにγ-GTP上昇,LAP上昇があらわれることがある。(6)**消化器** まれに偽膜性大腸炎等の血便を伴う重篤な大腸炎があらわれることがある。腹痛,頻回の下痢があらわれた場合には,直ちに投与を中止するなど適切な処置を行うこと。ときに,下痢,軟便,また,まれに悪心,嘔吐,腹部膨満感等があらわれることがある。(7)**皮膚** まれに皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)があらわれることがあるので,観察を十分に行い,異常が認められた場合には投与を中止し,適切な処置を行うこと。(8)**呼吸器** まれに発熱,咳嗽,呼吸困難,胸部X線異常,好酸球増多等を伴う間質性肺炎,PIE症候群等があらわれることがあるのでこのような症状があらわれた場合には投与を中止し,副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

■薬価基準収載 ■「用法・用量」,その他の「使用上の注意」については,添付文書をご参照下さい。

〔資料請求先〕塩野義製薬株式会社 製品部 〒553 大阪市福島区鷺洲5丁目12-4

'94.3作成A42

シオノギ製薬
大阪市中央区道修町3-1-8 〒541

カルバペネム系抗生物質製剤

チエナム®点滴用

指 要指 〈薬価基準収載〉

イミペネムの略号 IPM

TIENAM®

〔Imipenem/Cilastatin sodium〕

日抗基:注射用イミペネム(略号:IPM/CS)

【効能・効果】、【用法・用量】、【使用上の注意】等については、製品添付文書をご参照下さい。

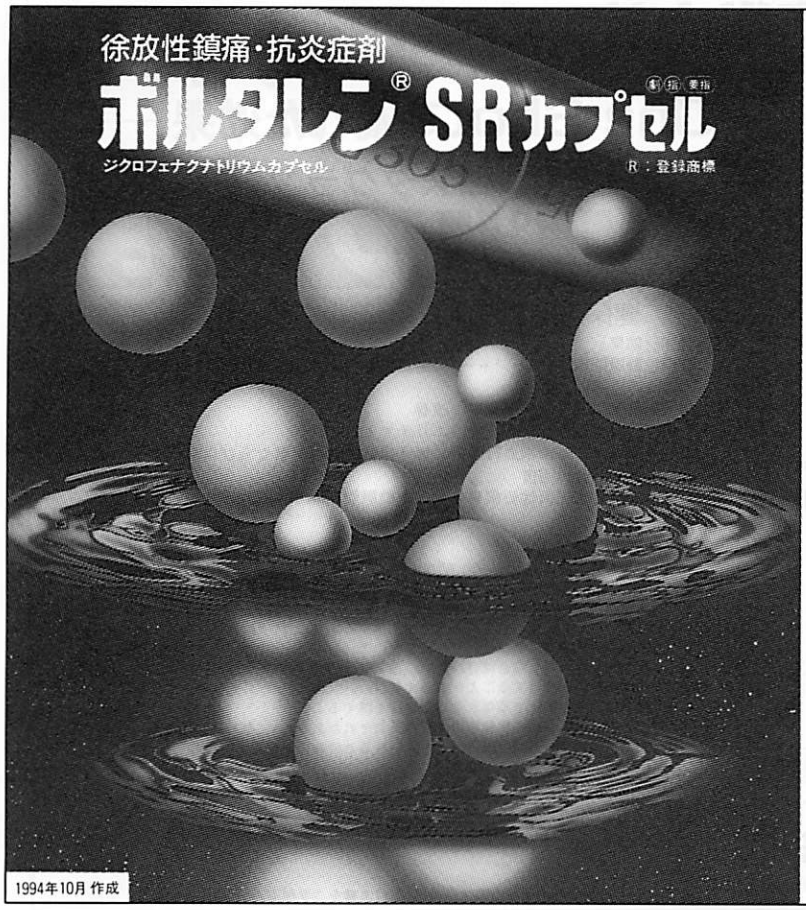
(資料請求先)

萬有製薬株式会社

〒103 東京都中央区日本橋本町2-2-3 03(5203)8111代表

94.5

05-95TEN94-J-4740J



CIBA–GEIGY

■**組成**/ボルタレンSRカプセルは、日本薬局方ジクロフェナクナトリウムの速溶性顆粒と徐放性顆粒を3:7の割合で混合し、白色の硬カプセルに充填した製剤で、1カプセル中にジクロフェナクナトリウム37.5mgを含有する。添加物(カプセル本体中)：亜硫酸水素ナトリウム、ラウリル硫酸ナトリウム

■**効能・効果**/下記の疾患並びに症状の鎮痛・消炎
慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群

■**用法・用量**/通常、成人にはジクロフェナクナトリウムとして1回37.5mgを1日2回食後に経口投与する。

■**包装**/カプセル(37.5mg)：100カプセル・1000カプセル

■**薬価基準収載**

製造/同仁医薬化工株式会社(東京都中野区弥生町5丁目2番2号)
販売/日本チバガイギー株式会社(兵庫県宝塚市美幸町10番66号)

※使用上の注意等詳細につきましては製品の添付文書をご覧下さい。

日本チバガイギー株式会社
兵庫県宝塚市美幸町10番66号

※資料は日本チバガイギーの医薬情報担当者にご請求願います。

早く、きれいに。

アプレースは、すぐれた胃粘膜再生促進作用を発揮します。

薬価基準収載

胃炎・胃潰瘍に

胃炎・胃潰瘍治療剤

アプレース®

指 アプレース錠100mg・アプレース細粒 APLACE®

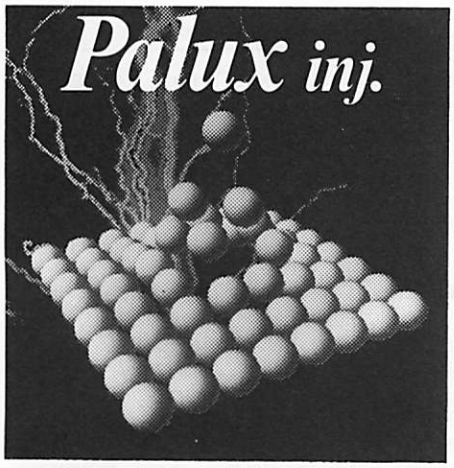
一般名：トロキシピド(troxipide, r-INN)

効能・効果、用法・用量、使用上の注意等については添付文書をご覧下さい。

杏林製薬株式会社
東京都千代田区神田駿河台2—5

〈資料請求先：杏林製薬学術情報部〉

9208A42



プロスタグランジンDDS製剤

病巣血管へターゲッティング

One Shotで優れた効果

静注用プロスタグランジンE_1製剤

パルクス®注

健保適用　劇 指 要指　アルプロスタジル注射液

〔効能・効果〕
■慢性動脈閉塞症(バージャー病、閉塞性動脈硬化症)における四肢潰瘍ならびに安静時疼痛の改善
■下記疾患における皮膚潰瘍の改善
進行性全身性硬化症　全身性エリテマトーデス
■振動病における末梢血行障害に伴う自覚症状の改善ならびに末梢循環・神経・運動機能障害の回復
■動脈管依存性先天性心疾患における動脈管の開存

〔使用上の注意〕
1.一般的注意
(1)慢性動脈閉塞症(バージャー病、閉塞性動脈硬化症)、進行性全身性硬化症、全身性エリテマトーデス、振動病の患者に適用する場合には、次の事項を考慮すること。
1)本剤による治療は対症療法であり、投与中止後再燃することがあるので注意すること。
(2)動脈管依存性先天性心疾患の新生児に適用する場合には、次の事項を考慮すること。
1)重篤な疾患を有する新生児への投与なので、観察を十分に行い慎重に投与すること。なお、副作用が発現した場合は、投与中止、注入速度の減速など適切な処置を講ずること。
2)無呼吸発作が発現することがあるので、投与中は呼吸状態の観察を十分に行い、発現した場合は投与を中止するなど適切な処置を講ずること。
3)過量投与により副作用発現率が高まるおそれがあるため、有効最小量で維持すること。
4)長期投与により長管骨膜に肥厚がみられるとの報告があるので観察を十分に行い、必要以上の長期投与は避けること。

〈2.次の患者には投与しないこと〉
(1)重篤な心不全の患者。
(2)妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。
(3)本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者。

※用法・用量、その他の使用上の注意等は、添付文書をご参照下さい。

PX63B52B

● 製品特長
1.PGE_1+微細脂肪粒子担体を開発(リポ化)
2.病巣血管へターゲッティング
3.潰瘍、安静時疼痛に優れた効果
4.One Shot静注が可能
5.副作用発現率は4.42%(300/6787例)
—血管痛0.96%など—(成人対象疾患)

〈警告〉
動脈管依存性先天性心疾患(新生児)に投与する場合には、本剤投与により無呼吸発作が発現することがあるので、呼吸管理設備の整っている施設で投与すること。

資料請求先　大正製薬株式会社
〒171 東京都豊島区高田3-24-1 ☎(03)3985-1111

マルホ

薬価基準収載

鎮痛・抗炎症剤

(指) ミナルフェン®錠100・200

炎症部位での新しい作用機序:ダブルインヒビター。

一般名:アルミノプロフェン

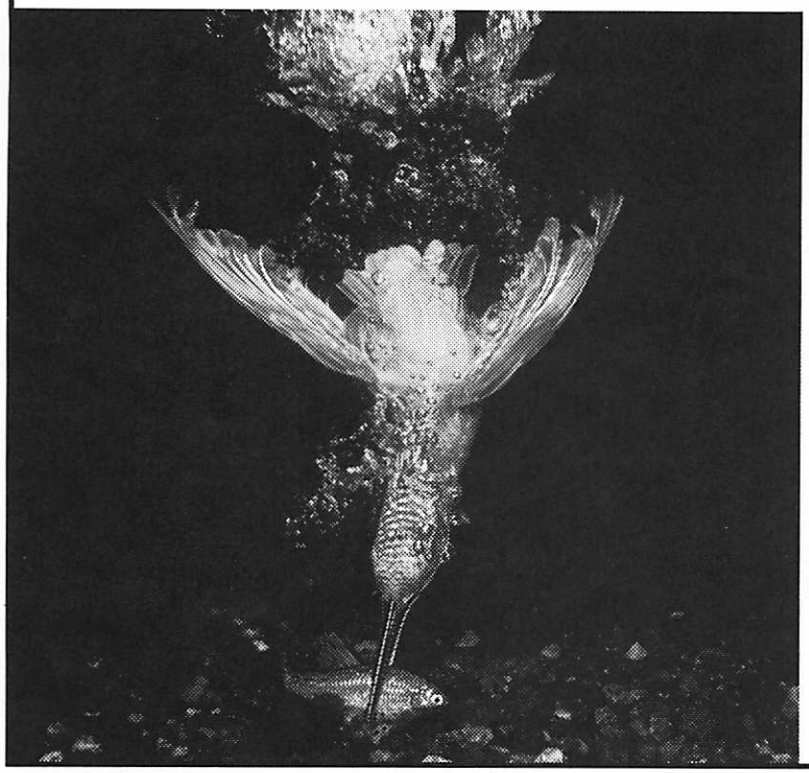
効能・効果、用法・用量、使用上の注意等については添付文書をご覧ください。

資料請求先　販売 マルホ株式会社 大阪市北区中津1丁目6-24
製造 富士レビオ株式会社 東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル12階

0589

しなやかに、痛みの深部へ。

DDS(ドラッグ・デリバリー・システム)からの新しいアプローチ 経皮鎮痛消炎剤──ミルタックス



経皮鎮痛消炎剤　薬価基準収載

指 **ミルタックス®**

Miltax®　(ケトプロフェン貼付剤)

■効能・効果

下記疾患ならびに症状の鎮痛・消炎
変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛

★用法・用量、使用上の注意等の詳細につきましては、製品添付文書をご参照ください。

いのち、ふくらませう。

発売元 **第一製薬株式会社**

資料請求先
東京都中央区日本橋三丁目14番10号

製造元 **埼玉第一製薬株式会社**
埼玉県春日部市南栄町8番地1

B5½ 94.10